第９回　静岡市持続可能な森づくり研究会　議事録

【日時】令和８年３月９日（月）14:30～
【場所】静岡市役所 新館９階 特別会議室（葵区追手町５－１）
【出席者】＜静岡市持続可能な森づくり研究会＞

静岡県立農林環境専門職大学　学長	鈴木　滋彦
速水林業　代表	速水　亨
ＷＷＦジャパン自然保護室森林グループ	相馬　真紀子
静岡市森林組合　代表理事組合長	渡辺　武
清水森林組合　代表理事組合長	中山　勉
井川森林組合　代表理事組合長	森竹　史郎
林業家（狩野林業株式会社　代表）	狩野　正明
林業家（株式会社 MARUGOH 代表取締役）	鈴木　勝貴
葵区自治会連合会（梅ヶ島地区連合自治会長）	小泉　住雄
駿河区自治会連合会（川原地区連合自治会長）	白木　康雄
清水区自治会連合会（両河内地区連合自治会長）	中山　治己

＜静岡市＞（事務局：森林経営管理課）

環境局　森林経営管理課	企画係長	宮川　研吾
	企画係　主査	大友　光夫
	企画係　主任主事	山田　祐記子
	企画係　主任主事	保坂　洋斗

【議 事】
事務局説明（パブリックコメントの意見概要と計画への反映について）

【内　容】
■事務局報告（パブリックコメントの意見概要と計画への反映について）
鈴木）４月から長くやってきたが今回が最後となる。当初から申し上げてきたが、この研究会での議論を提言としてまとめて市長・市の行政にお届けする。ベースは林業だが、環境という大きな枠組みで立派な提言を作りたい。この計画が市の指針となって施策を進めていくともものと認識している。先月は研究会がなかったが、事務局が個別にヒアリングして意見を聞いたと報告を受けている。これらはこの計画書に盛り込まれていると思われる。また、パブリックコメントでも多くの意見が寄せられたと聞いている。これらの紹介を事務局にしてもらう。
事務局）それでは、森林づくり基本計画に関するパブリックコメントの結果についてご説明

いたします。

１　パブリックコメント実施結果

今回のパブリックコメントでは、46 名の方から 132 件のご意見をいただきました。このうち、1 件の中に複数の意見が含まれているものを論点ごとに整理した結果、実質的な意見数は 142 件となっています。提出された意見を内容別に整理したところ、森林分類や森林づくりの方向性に関する意見が最も多く、61 件となりました。これは、計画で新たに整理した「環境林」と「循環林」という森林分類に対して関心が高かったことによるものと考えています。

２　意見の全体構造

寄せられた 142 件の意見を論点別に整理すると、最も多かったのは森林分類・森林づくりの方向性に関する意見で 61 件でした。次いで、木材利用・地域経済に関する意見が 22 件、担い手の確保に関する意見が 14 件となっています。このことから、市民や関係者の関心は森林分類の考え方や森林管理の方向性に集中していることが確認されました。

３　主な意見と、市の方向性

森林分類・森林づくりに関する意見 61 件は、大きく三つに分けられます。一つ目は、森林分類の考え方そのものに関する意見です。二つ目は環境林の森林づくりに関する意見です。三つ目は循環林の森林づくりに関する意見です。

具体的に、森林分類の考え方については「環境林と循環林の違いが分かりにくい」「どのように区分するのか分からない」といった意見がありました。これについて市としては、森林分類は森林の名称ではなく、森林づくりの方向性を示す概念であることを明確にしました。また、地形条件、路網状況、施業の可能性、公益的機能、所有者意向などを踏まえ総合的に判断する考え方であることを整理しました。

分類基準については、計画では、森林分類を検討する際の参考指標として、路網からの距離などの基準を示しています。これに対して、「距離基準が固定的に運用されるのではないか」「一律に判断されるのではないか」「環境林に一方的に区分されると、木材生産ができなくなるのではないか」といった懸念が示されました。これについて市としては、これらの基準は森林整備の方向性を検討する際の目安であり、固定的な基準ではなく森林の状況や地形条件などを踏まえ、総合的に判断するものであることを明確にしました。

環境林の森林づくりに関しては、森林カーボンクレジットなどの新しい取組については、制度の仕組みを分かりやすく説明してほしいという意見がありました。また、放任竹林の拡大を懸念する意見や、竹林整備を進めるべきという意見が寄せられました。

森林分類・森林づくり以外の意見として、木材利用に関する意見が 22 件ありました。主な内容としては、「オクシズ材の利用をもっと進めるべき（拡大すべき）」「木材価格の低迷をどうするのか」といった意見です。これについて市としては、循環林の基本方針である「育て・伐り・使い・植える」という森林の循環利用を重視し、公共施設でのオクシズ材の積極的な活用など、オクシズ材の利用拡大に向けた取組を進めていくこととしています。

これらについては、制度の透明性を確保しながら取組を検討するとともに、竹林整備や樹種転換などの取組を進めていく方向としています。
４　パブリックコメントの計画への反映
今回寄せられた意見を踏まえ、特に、森林分類の考え方、分類基準の位置づけ、木材利用の方向性、について、計画書の説明を補足し、より分かりやすい計画となるよう整理を行いました。
以上で、森林づくり基本計画に関するパブリックコメント結果の概要説明を終わります。

本日お配りしている計画本編をもって、現時点での計画内容は一旦の取りまとめとなります。今後、庁内での最終調整および鈴木会長との確認を経て、計画を完成させる予定です。研究会の皆様には、この一年間にわたり多くのご助言をいただきました。この場をお借りして、事務局一同、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

■上記を受けての意見交換
鈴木）パブリックコメントの意見全てを報告するのは大変なので、まとめて説明してもらった。意見などはあるか。
小泉）一般の人からのコメントか？林業関係者からなのか？
鈴木）誰が答えたものなのかという質問である。
事務局）委員の方々含め林業関係者、一般の方々など様々な人から来たものである。一般の方々からは木材の利用、林業関係者からは森林の施業のことが多い傾向にあった。
鈴木）細かな数字はわからないが、個人は特定しているのか。
事務局）特定しているが、公表はしない。
速水）パブリックコメントをまとめるのであれば、今回は最終の研究会なので仕方ないが、属性や傾向など分析した資料があるとよかったと思う。
中山治）的を射た集計と感じている。まとめ方は速水委員が言うように課題があるのかもしれないが、良い集計が出てきたと感じている。
鈴木）パブリックコメントはもう少し読み込んで計画書に反映させるのか？あるいは、パブリックコメントの内容はすでに計画書に反映されているか？
事務局）今日お配りしているものは、頂いた意見を反映済の計画書である。
鈴木）パブリックコメントの意見を一度全て見させてもらったが、事務局がエクセルで細かく対応を検討していた。計画書にはそれらが反映されているということである。
鈴木）これが最終版の計画本文となる。若干の変更などはあとから反映できるとのことである。最後の研究会なので、委員一人一人から意見をもらいたい。最終版に対しての意見や、9回の研究会を通じての意見、もしくは今後に対しての意見や思いなど何でも構わない。
渡辺）かねてから申し上げているが、人がいないことが現場の最大の課題。また無理に路網を入れると災害に弱くなることも懸念している。こういったことは計画書に入れていただい

たと思っている。広大な面積をどう施業していくか、その施業を持続するために人手不足をどう解消するか、林業・木材関係者も見ていると思うが、この懸念に対し、環境林と循環林に分類することでこれから何ができるか、県や国に頼らず市として何ができるか、もう少し深堀りして示してほしい。人材確保における関係者それぞれの立場を明確にするなど。森林組合は組合員から成り立っているが、先般行った座談会では組合員からの意見として、将来を考えたときに子どもにどう引き継ぐか、もっと言えば所有森林を処分したいとか、架線で搬出できなければ環境林になってしまうのか、市が買い取ってくれるのかなど様々な意見が出た。今後はもう少し出口を明確に示してくれたらありがたい。

中山勉）清水区に限った話として、何が必要で何が必要でないかを考えると、循環林でも環境林でもインフラ整備としては路網が必要である。清水区の路網密度は葵区の 1/3 程度にとどまっている。林道と作業道があって持続可能な森林整備ができると思っている。その点からも路網は重要である。

施業の内容について、清水区では 25％ぐらいの間伐を実施しており、昨年度まであった補助事業（いきいき間伐）の対象になっていた。県の補助事業（静岡県森林づくり県民税の「森の力再生事業」）の間伐では、40～50％ぐらいの列状伐採や群状伐採が対象となるが、清水区の山にとっては間伐率が高すぎて合わないので、10 年ほど補助を受けていなかった。諸事情により再開したが、組合員と相談し、あと 1、2 年で止める話になっている。理由は山がダメになるからである。間伐率 40%では、健全な森林を作るために必要な良い樹木も伐採しなければならない。近年は台風の大型化のためか風倒被害も増えており、間伐率 40%は危険である。山の健全度を保つ環境林整備のためには、間伐率は 20～25％程度でなくてはならない。保安林も環境林として捉えると、清水区のおよそ 3/4 は環境林になると思う。

この 1 年、研究会に参加させてもらって勉強になった。地域の森林や林業にあった施策が必要だと改めて感じた。組合の代表になってからの 15 年間では、過去にあった林道推進協議会の視察で様々な施業地を見て、多くのことを学ぶことができた。これから地震や異常気象が起こりうる中で、森林の整備は重要であり、それらへ対応し生命・財産を守るのは森林組合の仕事だと思っている。山を守る＝公益的機能の保全だと思っている。保全事業は重要事項であり、今後も継続していきたいので、行政にも理解と支援をお願いしたい。

森竹）井川はさらに山奥なので人材不足がより強烈だが、路網があると少し人材不足解消につながると思っている。

海辺と山の中では間伐率は異なる。山で 30～40％といった高い間伐率で間伐すると、残った木が積雪で全部倒れてしまう。土地によって施業が異なるので、そのあたりをご理解いただいて施策を検討してもらいたい。

狩野）林業家の立場での思いを発言させていただく。現在放置林と言われている森林の多くは、先人が木材生産で収入を得るために一生懸命植えてきたものなので、この計画での方針には一抹のさみしさを感じる。一方で、去年の年末に「最近の山林のほとんどが放置林であり、行政が管理しないと立ち行かない」と言われ、地主としてせつない気持ちになった。言

葉に詰まった記憶がある。
鈴木勝）森づくりと林業は異なる。この整理が最初に必要だったと思う。環境的な問題なのか経済的な問題なのか、この辺の整理もついていないまま、計画書を作成したのが残念だったと思う。この計画を難波市政の理想とするならば、現状にどう合わせていくかが今後の行政の課題だと思う。林業・森づくりの長い歴史を否定して、新しいことをやるのは少し違う気がする。時代に合わない部分を是正して肉付けしたりすることは重要だと思うが、最近の市は過去のことを全否定して新しいことをするような傾向にある気がする。もう少しうまく回ればいいと思っている。
中山治）一市民として意見する。市民の数に対し、圧倒的に少ない林業関係者が苦労してこの山林を整備してきたことに驚いた。市内人口の 99%以上は山林のことを知らないと思う。その山林を知らない人向けの説明に、多くのページが割かれている。6 章では一般社会との関係を述べていて、4 章も環境林の一部で森林の保全のことが書かれている。最初に比べて充実していて、だいぶ説明を充実してくれたなあと思う。これで満足というわけではないが、このような一般向けに丁寧に説明する姿勢により、少しずつだとは思うが、山への市民の理解が進むと思う。ありがとうございます。
白木）この研究会には１回欠席してしまったが８回参加して勉強させてもらった。これまで約 50 年間狩猟をやっていて、今の時期でいうと 3 月 15 日で狩猟が終わり、その後有害鳥獣駆除が始まってまた山に入る、というふうに山に入ることが多かった。しかし、この研究会で初めて循環林と環境林という考え方を知った。山を管理するには路網をつくらないといけないが、路網を作ると山は荒れる傾向にある。伊豆の方は特に顕著である。年々山は荒れてきていると感じる。
2050 年に市の人口は 53 万人になると難波市長が強調しており、林業の担い手はますます減少する。どうしたらいいのか検討が必要だが、今からではもう遅いくらいだと思う。何十年も前に検討すべきことであった。
皆さんは森林環境税を払っているが、それらが何に使われているかわからない。
また、木材の生産量について、今は立米、昔は石（こく）を使っていたが、オクシズ材がどれくらい市場に出回っているのか？前に質問したが答えが返ってこない。こういった機会なのでぜひ知りたい。
小泉）地域の代表として、梅ヶ島の話をしたいと思う。梅ヶ島では、地域自体に人がいない状態である。林業の担い手不足は当たり前で、観光業でさえ厳しい。50 年前と同じにはできない。担い手不足はなかなか解消しないと思う。梅ヶ島から街に出た人でも、小規模に森林を持ち続けている人がいて、それらの整理をしたいという意見が多い。昔は森林開発公団（現森林総研森林整備センター）に相談すると引き受けてくれていた。今はどうしたらいいのか、この辺をどうにかできればと思う。
シカ対策は防鹿柵の設置が義務化されたようだが、将来の撤去もセットで考えなければならないと思う。10 年くらいで柵が不要になるが、現状ではほとんどが撤去されておらず、山の

中を歩きづらくなっている。経営計画にシカ対策を入れないと補助金が出ないみたいな話があるが、撤去のことも考えてほしい。また、スギやヒノキを伐採した後、広葉樹林化する場合でも５年経って天然更新できていないと、その時点で防鹿柵を設置せねばならないが、その後の撤去を所有者が自前ではできないのが目に見えている。シカ対策のために防鹿柵を張ることで、山中が産業廃棄物だらけになるのを懸念している。皆で考える必要がある。
路網はしっかりした作り方が重要である。木の植え方と同じで、変な作業道の作り方をすると、災害につながるので、もう少し突っ込んだ議論をしてもいいと思う。計画は、最初のころの研究会の意見に回答する形でかなり意見を入れて、ありがたいと思っている。まだ完ぺきではないが、この先ステップアップしていけたらと思っている。
相馬）私は静岡市民ではないが伊豆半島で育った。父は昔から続く入会林、今でいう共有林の下刈活動に今でも参加している。周辺地域では人口も減少傾向にあり、今後どうなるのか心配している。入会林の管理ができなくなると田畑や人家にも影響が出るおそれがあり、この点でも人口減少や担い手不足は深刻だと感じる。伊豆も静岡も状況は似ているが、伊豆と比べて大都市である静岡市でさえも人手不足は深刻だと感じた。この研究会での話は勉強になることが多く、環境団体の一員としてだけでなく、一人の日本人として森林づくりは考えていかねばならない問題だと思った。計画書本文は様々な意見が入ったのでかなりよくなったと思う。ただ、事務局から口頭で聞いたときにパブリックコメントの多くは林業関係の人だったと。この計画は森林づくりの計画なので、誰もが理解しやすいように簡単に書けばいいというわけではないが、一般市民にはまだ計画を読むにはハードルが高いのかもしれない。山があって里山があって里があって農地があって町がある、みたいな構造は市民の多く、特に子どもたちは理解できないのではないか。都市部で平穏に過ごせるのは山の整備あってこそである。現状の理解不足は社会の分断につながる。この計画書を活かした次のステップとして、市民の方々にどうやってこの計画を伝えていくかを考えていただきたい。他の委員からの発言もあった通り、昔からやっていたことを否定するのでなく、山の管理があったからこそ都市部で安全に暮らせているということを、若い次の世代に広めていきたい。そういうことを知らずに生きている人たちが、知らないまま社会の中心になると、ますます情報が分断されてしまう。税を払っている市民に知らせるということを、ぜひ、考えていただきたい。
シカ対策のネットや筒を撤去する予算もなければ、撤去する人もいないというのは、他の地域でも聞く。プラスチック製品は生分解製を使っているかもしれないが、そこら中にあふれてくると、新たな環境の問題にもなりうる。市として考える必要があると思う。WWF としてお話ししている生物多様性や温暖化は別に難しい問題ではなくて、静岡市で言えば雨の降り方が変わる、気温が変わる、動物のすみかが変わる、これらによって山が変わるみたいなことを、地域の皆さんに発信してほしい。トラやサイ、ゾウなど希少な動物を守ることだけが生物多様性保全でなく、クマやカモシカ、シカなどの生息域が変わっているということが市内でも起きていると思うので、こういったことが生物多様性の保全や生物の変化そのもので

ある。子供たちは気候変動や生物多様性について学校で勉強すると思うが、地元静岡市で起きているのはそういうことだよ、というような教育を実施してほしい。
環境林のクレジットについては注目度が高いと思う。地元の森林、自然環境にとってクレジットが良い形で使われるよう、市で考えてほしい。
速水）大変勉強になった。ありがとうございます。将来の姿をどのような数字、どのような項目で表すかが大事である。整備可能な森林面積を、労働力から算出する、林道から算出する、など。この計画ではそれなりに数字を示したと思う。わかりやすいエビデンスを示すことが重要で、市民にどう理解してもらうかが次の課題である。
施業する人にとって、再造林するコストが出ないと言うのは、末端価格でなく立木価格であり、木材価格を立木価格で整理しているのはよく勉強しているなと思った。立場によりどの価格が木材価格なのかの明確に分けないといけないわけで、計画書では一部不明瞭なところもあるが、割と整理していてよいと思う。最近言われることに、立木価格が例えば200万円で、再造林費がもう少しかかってしまって採算が合わないという話があるが、林業はそうではなくて、その原価は歴史的原価で見るべきで、40年前や50年前から投資してきた金額の総計を差し引くわけである。細かく計算すると利益は出ているはず。次の造林にコストがどれくらいかかるか、金利がどれくらいなのかも含めて算出していく必要がある。公が出す数字ということであれば、その辺も整理していないといけないと思う。売れた材の額と再造林費を単に比較するのは、お金のフローだけの話であり、経済の話ではない。林業の経営でもおかしな話であり、一般企業から見てもおかしいと思う話である。こういったことをしっかり整理しないと、一般企業との連携も難しくなると思う。多くの関係者を巻き込むのであればそういった数値を示す必要がある。
日本では、森林は圧倒的に自然資本として捉えられているが、経済資本としてはGDPの0.04%ぐらいと言われている。ヨーロッパでは林業は経済資本として捉えられていることが多い。ヨーロッパでは路網がしっかりついていて、路網は社会資本と考えられている。路網のことは計画に記載されている通りである。今後は自然資本、社会資本、経済資本を整理し、それらのコストは誰が負担すべきなのかの議論が重要だと思う。計画には、間伐や育林、再造林などが記載されているが、最近林業ではカーボンクレジットが注目されていて、そのことも計画に記載されているが、森林が持つ機能を材価以外の有価にどうやって変えていくか、その一つがカーボンクレジットと捉える時代になってきている。長い間林業経営をやってきて、本来は木材販売だけで経営していきたいが、実際はいろいろなことをやらなくてはいけなくて、悔しい思いをしている。従業員を養っていくにはそうも言っていられないのが現状であり、カーボンクレジットもやっている。最近求められることの一つに、子どもの教育を一緒にやりたいというのがあって、今度そういうツアーを実施する。今後は様々な森林の使い方が出てくると思う。私が住んでいる三重県紀北町では人口は1.2万人くらいしかいない。合併してもそんな状態で、大きな都市からは1時間以上かかる。静岡市は大きな人口を持った都市で、そういった人たち向けに森林の産業化みたいなものができるとよい

し、それが今後の問題と感じている。
鈴木）たくさんの意見をありがとうございます。私も個人的な想いを話させていただく。大学では、林業だけでなく、コメの価格やアニマルウェルフェアにも携わっている。畜産に関しては、前の東京オリンピックのアスリート向けの食材として、ケージフリー（平飼い）の卵やストールフリー（拘束しない）のポークの需要があったが供給できなかった。そんな業界に学生を送り出している。林業同様に厳しい業界である。
大学の関係で高校のグランドデザインにも関わっていて、県内では2040年に高校の数が9分の5くらいになる。大学のエリアでは7校が3校に減るようだ。そういった状況の中で若手の技術教育、職業教育、農業や工業の教育をどのようにしていくか。今までは進学校に行って受験勉強をするのがよいというような構造があったが、高校も減る中で教育内容を見直そうという流れが起こっている。人口が減る中でどうやって私たちの産業に若手を引き付けるかが課題と感じている。こういったことも計画書にもう少し含められたらなと思っている。
さらに個人的なことを言うと、東京で生活している息子が、子どもの教育のために故郷に戻ってきたいと思っているようだ。静岡市にはそういった受け皿というか、そういった流れをつかむとよいのではないか。
この研究会は立派な計画をつくることが役目なわけだが、計画ができて、これに沿った施策がベースとなると理解している。研究会を進めていく中で大変だと思ったのは、市内には3つの森林組合があり、特徴も異なる中で、なにがしかの共通の意見を盛り込んで決めなくてはならなかったことだ。なんとかまとまったのがこの計画書である。個別にはまだ検討しなくてはいけないとは思うが、貴重な意見を盛り込んで最終版にしたいと思っている。また見ていただければと思う。これから次のステップをどうするのかは課題だがその点と、都心から静岡に帰ってきたい人たち、帰ろうと思わせるようなことの2点を「あとがき」に含めていこうと思う。委員のみなさんは事務局に言いたいことが色々あるかもしれないが、良くここまで来れたと思う。もう少しいいものにしていかなくてはいけないが、ここまでまとめていただいて、仕事とはいえご苦労様と言いたい。最後になるが、微調整は会長一任ということでよろしくお願いする。研究会は9回と長かったが、皆様のご協力があってこそのことだった。感謝申し上げる。
事務局）静岡市でどれくらいの木材が生産されているのか？は、本文17ページにある。あくまで、県が実施した調査資料から市が算出したデータである。市内で施業した市外の林業事業体の生産量は入っていないなど議論の余地はある。このデータは林業事業体等が任意で答えているものなので、やや不明瞭な数値ではあるが、市としては県のデータから整理するしかできないのが現状である。

（以上）